

## かんちゃんのお遍路さん (1)

泉州労山 管和彦

(編集者・注) この報告は、2013年春の管和彦氏の四国遍路37日間通し歩きの記録です。

### お遍路さんを始めた動機 <遠い記憶>

幼い日の記憶は誰にもあるはずです。私の場合は、菜の花が咲く頃に鈴の音やご詠歌と共にやってくるお遍路さん達の姿でした。私の生れは愛媛県久万高原町で、松山と高知を結ぶ国道の県境付近にある山村でした。近くには四国霊場45番札所の岩屋寺があるため、春になるとお遍路さんがよく村を訪ねてきました。

江戸時代の四国遍路は「捨て往来手形」を持って巡礼をしました。それには「遍路に出ているので関所を無事通してほしい。どこで行き倒れても世話をかけるが葬むってほしい。故郷への連絡は不要」と書かれており、四国遍路は死を決しての旅であり、白装束で、杖の形は卒塔婆でした。私が子供の頃のお遍路さんも、今とは違い保存食やコンビニやコインランドリーやATMも無いので、次の部落に入れば各戸を訪ねて衣食住を調達する毎日だったと思います。お遍路さんが来たら、母から榊一杯の米をあげるよう言われてよくあげたものです。四国にはそういう、お遍路さんに対する「お接待」の文化が根付いており、そのようにして地元の人々がお遍路を助けていました。

子供の頃から、いつか自分もお遍路をしてみたいと思っていました。退職が近づくにつれて日本の原風景のような「菜の花とお遍路」の姿が甦ってきました。そういう動機と共に、一番過酷な「通し歩き野宿遍路」を可能にしたのは、山岳会で重いザックを担いで雪山を超える体験やビバーク体験があり、体力的にも技術的にも、何があっても対応できるであろうという見込みがありました。また、長期留守に出来る家族の理解があったからこそ、なし得た37日間通し歩き野宿遍路だったと思います。

考えてみるに、①「夢は持ち続けることにより、いつか実現できる」。今は出来なくても、いつかやって来るその時まで夢を持ち続ける。②「機を逃さない」。チャンスは少ない。躊躇せず一気に飛び出せ。一生のうち今日と言う日は二度とやって来ない。



香川県屋島の八十四番札所「屋島寺」  
(2013.6.15 屋島にて)



屋島寺から八十五番札所へ向かう筆者